小品

理想の美人

永代美知代

下

一人別れて來はしたものゝ、登代子は別段何處へ行くあてもありません。おまけに後では定めし、皆なで以て笑ひ崩れて居るのだらうと思ふと、今更ら何だか途方もない殘念な事を仕出來したやうな口惜しさをさへ感じました。

「私だってもう少し人並の容色に產れてゐたら……」

涙がポタポタ溢れて落ちました。そして直ぐ又掻きむしるやうな嫉ましさが、胸一杯を麻のやうにもつれ亂します。

「せめて河本さんのやうに髮だけでも美しかったら、小森さんのやうにお鼻の格好がよかったら、角野さんのやうな色白だったら——あの人達はそれな自慢で、わざとあんなに美人さへ見ると素敵々々って、私に當てつけるんだわ、本當に／＼口惜しくって堪らない。」

登代子はもう歩く勇氣もありません。丁度通り合せたお寺の中へ入って、埃によごれた本堂の段梯子に腰掛けました。

「それにしても何故神様は此世の中に美人を作ったり、醜婦を產んだり、そんな不公平をなさるんだらう？」

登代子は第一それが忌々しくって堪りませんでした。

ふと、氣がつくと誰だか背後に居さうで、振り向いて見ると、白髮のお婆さんが口元に氣味の惡い薄笑ひを浮べながら、じっと登代子を見据ゑて佇みました。

「お前は美人が羨しいのか」

「え！」

じっと見詰めたお婆さんの眼色の怖ろしさ、まるで心の底まで視透さないでは置かぬ鋭さに、登代子は肩をすぼめて俯向きました。

「羨しけりゃ都合でわたしが手傳って美人にしてあげても可い、何でも望んで云って御覽。」

「まあ！ではどうぞ私の鼻を、否それよりも色を白くして頂きませうか、否それよりも……」

登代子は何から頼んで好いか解りませんでした。

「周章てゝはいけない、落付いて順順に云った方がよろしい。私は幾つでも望み叶へてあげるから。」

「では濟みませんが眼鼻立ちをよくして、色を白く。」

「よろしい、それから。」

「あの、髮の色澤をよく澤山にして、體の形を惡氣にごうぞ」

「よろしい、それから。」

「左樣ですれえ、もうなかったかも知れません。」

「それ、これでよく寫して。」

お婆さんは懷中鏡を渡して呉れました。

「有難う御座います。」

鏡に寫った顏を見て、登代子は天へも昇る心地に喜びました。

「お陰ですっくりよくなりました有難う存じます。」

「まだ變へて貰ひ度い點があれば遠慮なく云って御覽。」

「では眉と齒並の具合をどうぞ。」

「それから。」

「もう結構で御座います。」

「まだあるだら？。」

「いゝえもう、澤山で御座います。」

「確かさ左樣か。」

「御座いません。」

「そんなら お前は本當の美人になり度いとは思はないのか。」

「え？」

登代子は不審氣にお婆さんを見上げました。

「たわけ者奴！　お前は先刻友達の前で何と云った！」

「ハッ！」

登代子は恐れ入って平伏しました。併しわれと自分の聲で氣がついて、四周を見廻すと、今のは假寐の夢でゝもあったのか、氣味惡いお婆さんの影も形も見えませんでした。何時の程にか夕が迫って豆腐屋の喇叭と、夕刊屋の鈴の音が町々に騷々しい。

登代子は立上って家へ急ぎました。（終）

雲來去　秋色（横山大觀筆）